

【論文】

「うちとくる」女性の非貴族性

—『源氏物語』の用例から—

宮 武 利 江

『源氏物語』における「うちとく」の語義は「外部に対する構えを解く」ということが中心であると考える。ここから派生するさまざまな用法は、気を許してくつろいでいる状態と、人に心を許すという状態の二つに大別できる。前者は当然一人で行うときに現れやすく、その場合は特にマイナスではないが、人前で「うちとけ」た姿を見せることがプラス評価されるのは源氏ぐらいである。後者は原則的に上下関係の下の側の行為であり、自分を相手にさらけ出す、という含意があるとも考えられる。そのため、子どもや若い女性が「うちとくる」主体になりやすく、うちとけられた方からは相手が「かわいい」と感じられ、プラス評価を与えられ得る。ただし、ある程度以上の階層に属する女性であれば、簡単に「うちとくる」ことは常識に反する。「うちとけ」たように見えても、「すぎがある」とは感じさせない品格があり、うちとけられないことが、上流の女性として最高級の評価を受けるためには必要である。「うちとく」があらわす状態や行為は、高貴な身分の女性にはあまりふさわしくないものと解釈でき、さらには「うちとく」という動詞が、登場人物の人物造型にも大きく関与していると考えられる。

キーワード：うちとく、源氏物語、評価、人物造型、語義

はじめに

現在、筆者は『源氏物語』を中心に、価値判断に関わる形容語類を取り上げてその語義の中心を探る、という研究を継続して行っているが、その過程で「うちとく」という語が、その使用場面・文脈から人物造型や評価に関わるように感じられて、この語を価値判断に関わる形容語類の一種に含められる可能性を検討してみた。「うちとく」は動詞だが、動作性を表すというよりも、その結果・状態に焦点がある語と考えてよいとも考えたからである。しかし、「うちとけ」た状態になることについて評価が下されることはあるが、「うちとく」という語自体の語義の中に評価性を見いだすのは困難なこと、また、「うちとけ」ていることが描写される場合のすべてが、一律にプラスかマイナスのどちらかになるわけではないことがすぐに判明した。とはいえ、この語に感じられるある種の「評価」性を明らかにしてみるべく、どのような対象に対して、どのような場合に用いられる語なのか、あらため

て分析してみることとした。

一、辞書的な解釈と問題の所在

中古の「うちとく」に対する日本語学的見地からの先行研究は、管見ではほとんどないに等しく、『源氏物語』の夕顔巻のこの語の使用に言及した斎藤暁子氏の論が見られたのみである。現在まで、この語の語義については特に問題となる点が存しないと見なされているということであろう。

日本国語大辞典(第二版)では、「うちとく(うちとける)」の語義は、

- ① 氷などのように固まっていたものが溶ける。
 - ② 周囲への心配りをゆるめてくつろぐ。緊張がとけて心がゆったりとなる。心が落ち着く。
 - ③ 人(主に異性)との交際で、心隔てがなくなる。気詰まりなくつき合う。なれ親しむ。
 - ④ 油断する。警戒心がなくなる。
- の四つのブランチに分けて説明されている。

①は物理的に「とける」ことを言うもので、この語

の原義といえる。そこから比喩的な用法として②③④のような語義の拡大が生じたのだと考えられるが、ここで言う②と④はかなり類似した用法で、連続性があり、気をゆるめる↓油断するという「程度」の問題と考えることもできよう。③は、単なる状態や行為についてではなく、特定の人対人のつきあい方について用いられたときに生じる意味で、特殊な用法と考えてよいだろう。現代語の「うちとける」は、人付き合いについて用いられる場合が多くなっているが、中古の日記・物語の世界では、「気を許す・くつろぐ」の意味と解釈できる場合の方が、特に男女間における「心をひらく」の意味に解釈すべき場合の二倍程度多く現れるように見受けられる。

辞書の記述の仕方では、「うちとけ」た状態である人や、「うちとける」行為そのものに対する評価にまで言及する語とは捉えられていないようであるし、含みとして持つかどうかにも特に触れられていない。しかし、④のように「油断する」と現代語訳されると、そこには好ましくない状態であることが含意されると、一方、②や③の場合はどちらかといえばプラスのニュ

アンスが漂う。「うちとける」ことは、あくまでもその場面によってプラスにもマイナスにも評価されるものだったということなのだろうか。あるいは、それがどちらになるかについて、何らかの傾向や基準のようなものを考えることができるのだろうか。

たとえば、『源氏物語』末摘花巻に、「にはかに我も人もうちとけて語らふべき人の際は際とこそあれ」という表現がある。皇族の姫君である末摘花に興味を持ち、性急に女房に取り次ぎを頼むが、ひたすら内気な姫君だからといったんは断られた源氏が、まあお互いにいきなり「うちとけ」て会うような身分ではないから：と自分を納得させている言葉である。また、明石巻では、なかなか心を開こうとしない地方豪族の娘、明石君に対し、源氏が「(物嘆かしうてうちとけぬ心ざまを、)こよなうも人めきたるかな、さしもあるまじき際の人だに」と感想を持つ。これらの例を見ると、自分の高い女性は簡単に「うちとくる」ものではない(すぐに「うちとくる」のは、はしたない、こと?)、というように、身分や階層と「うちとく」という行為の関連も視野に入れるべきかと思われてくる。

はたして「うちとく」ということの善し悪しは、平安貴族社会でどのように受け止められていたと解釈すべきなのだろうか。以下の節では『源氏物語』の全用例を検証することで、この点を明らかにしてみたいと思う。

二、源氏物語の用例分析

『源氏物語』には、「うちとく」一五九例、「うちとけ」十名詞^①八例の、あわせて一六七例の「うちとく」を見ることができ、日本国語大辞典の言う①の用法は見当たらず、すべて人の心や態度が「とける」とに対して用いられている。

今回、『源氏物語』の用例を概観した結果、少なくとも『源氏物語』における「うちとく」の語義としては「主体が自分の外部に対する構えを解く」ということが中心であると考えに至った。個別の用例は、その場面によって「気を抜く」程度から「緊張しない・くつろいでいる」様子をあらわしたり、「油断する」と解すべきだったりするし、「身構えない」だけでは

なく「表面をつくろわれない」とか、「あけつびろげであけすけ」と現代語訳するのがふさわしいと思われることもある。また、物理的に「構え」を解く——つまり正装ではないとか、下着（に近い）姿であるとかといった、服装に対する言及と解釈できる場合や、連体修飾用法では「外部を気にしない」^②「ふだん」という現代語に置き換えるのが適する場合もある。

これらの中には、ニュートラルな記述で評価の対象となっていないものもあるが、前後に「うちとけ」た状態や「うちとくる」ことに対する評価と見られる表現（語）があらわれていることも多い。「めでたし」や「をかし」など、客観的に見て大いに好ましく思えることとされることもある一方、やや眉をしかめざるを得ないような態度として批判的に描写される状況もあり、否定形（「うちとけぬ」こと）が高く評価されていると見える例もある。いずれにしても、「うちとく」ことそのものが、一般的にプラス評価を受けるともマイナス評価を受けるとも、決まっているわけではない。男女間で「うちとく」が用いられたときは、「構えを解く」ことが「気を許す」につながり、さらには「心

をひらく」、場合によつては「心を預ける（自分をすべて相手にゆだねてしまう）」とまで解せるものも見られる。こちらにも、簡単に異性に気を許すことは批判の対象となるが、男性から見て意中の女性が心をひらいてくれることは望ましいことでもあるわけで、やはり一概に良いとも悪いとも言えないのである。

こうした「うちとく」の評価のプラスマイナスには、場面的、あるいは主体や対象（相手）となる人物などの要素がどのように関わっているのだろうか。何らかの基準が見いだせないか、分類整理してみることにした。

(一) 用法による分類

(1) 「うちとけ」た状態の評価

先に述べたように、「うちとく」の語義は「構えを解く」に総括できると考えるが、ここから派生するさまざまな用法は、大きく二つに分けることが可能である。一つは、一般的な状態としての「うちとく」で、「気を抜く・くつろぐ・構えない・油断する・気楽だ」

などと現代語訳できるものである。もう一つは、「誰かが誰かに『うちとく』」という文脈での「うちとく」で、「気を許す・なれ親しむ・心をひらく」などと現代語訳できる。どちらと判断すべきか、必ずしも明瞭でない例もあるが、一五九例の「うちとく」を一応分類してみたところ、前者が一〇三例、後者が五六例であった。まず、以下に前者の具体例を示しながら分析してみる³。(なお、〈〉は筆者の補入、≪≫は筆者による現代語訳である。)

まず、人が「うちとけ」た状態になりやすいのは、当然といつてよいだろうが、一人のときやごく限られた身内（姉妹など）だけでいるときである。それが、他者から観察されたときに初めて「うちとけ」ていると描写されることになるので、場面としては垣間見、覗き見ということになる。たとえば、次の例は、1が源氏が空蟬・軒端菰を垣間見したときの感想、2は浮舟の母中将君が、浮舟の婿にと心づもりしていた（が妹の婿になってしまった）少将の姿を見ようとす

る場面である。
1 見給ふ限りの人は、うちとけたる世なく、ひきつ

くろひ、そばめたるうはべをのみこそ見給へ、かくうちとけたる人のありさまかいま見などはまだし給はざりつる事なれば、何心もなうさやかなるはいとほしながら何も気づかず姿がはつきり見えるのは気の毒ながら、ひさしう見給はまほしきに：

【空蟬】

2 またうちとけたるさま見ぬにと思ひて、のどかにみ給へる昼つ方、こなたに渡りて物よりのぞく。

【東屋】

あるいは、一人でくつろいでいるところに突然侵入して、その姿を目にする場合もある。

3 〈源氏は〉例の忍びやかに渡り給へり。〈玉鬘は〉手習などしてうちとけ給へりけるを、起き上がり給ひて、はちらひ給へる顔の色あひ、いとをかし。

【胡蝶】

手習、琴や琵琶の演奏は、一人の部屋で「うちとけ」て行うことも多いようだ。

4 〈源氏は明石の御方の部屋に行くが、本人の姿は見えない〉手習どもの乱れうちとけたるも、筋かはり、ゆゑある書きざまなり。

【初音】

5 秋の夕のものあはれなるに、一条宮を思ひやりきこえ給ひて、〈夕霧は〉渡り給へり。うちとけしめやかに御琴どもなど弾き給ふほどなるべし、深くもえ取りやらで：

【横笛】

これらのように、周りに誰もいない場合は、「うちとけ」ていても基本的には特に批判される筋合いはないと考えられよう。4の例でも、気負ったところがなく趣向が変わって風情ある書きぶりとは評価されている。特に服装について言及されていると見られる場合は一一例を数えた。

6 〈玉鬘のもとへと出て行こうとする鬚黒大将の衣に香を焚きしめさせる北の方は〉身づからは萎えたる御衣ども、うちとけたる御すがた、いとど細うか弱げなり。

【真木柱】

7 〈薫は暑い夕方に女一宮の居室を垣間見する〉氷を物の蓋におきて割るとて、もてさわぐ人々、大人三人ばかり、童とゐたり。唐衣も汗衫も着ず、女房も童も、それぞれ主人の前で着用すべきものを着ず、みなうちとけたれば、御前とは見給はぬに、…

【蜻蛉】

8 〈夕霧が襖の向こうに入ろうとする落葉宮の着物
の裾を捉えて口説く〉うちとけ給へるままの御袖
のあたりもなよびかに、け近うしみたる匂ひなど、
取り集めてらうたげにやはらかなる心ちし給へ
り。

【宿木】

これらは「正装していない」とか「普段着の」の意で
解せるが、覗き見たときの姿や、わずかに引き留めた
着衣の感触などである。6では髭黒大将の北の方が夫
の前で「うちとけ」た姿でいるが、後述するように、
源氏物語の女性は夫に対しても簡単にそのような姿
を見せているわけではない。ここでは髭黒の外出着と
の対照もあるが、北の方が精神的な病で、普段から妻
として家も自分も整えてはいないこと（「うつし心な
きをりをり多くものしたまひて」「住まひなどのあや
しうしどけなく、ものきよらもなくやつして」）の
象徴とも考えられる。7のように全くの一人きりでは
ない構図であっても、それが女主人とその女房たち、
という「うちわ」の集団であれば、「うちとけ」てい
ること自体がマイナス評価されることは少ない。「常
のうちとけたる方《部屋》」「うちとけたる住みか」

のような「ふだんの」と現代語訳できる例もその延長
である。

さらには、ふだん目にするのではない気を許した姿
を見ることができた男性側が感激し、次例のように
「をかし」などとプラス評価することもある。このよ
うなとき、多く共起する形容語は「なつかし」である。

9 〈宇治の大君・中君姉妹が〉はかなきことを、う
ちとけの給ひかはしたるけはひども、〈垣間見し
ている薫が〉さらによそに思ひやりしには似ず、
いとあはれになつかしうをかし。

【橘姫】

10 大殿油などまありて、〈源氏と紫上が〉うちとけ
並びおはします御ありさまども、いと見るかひ多
かり。女君は廿七八にはなり給ひぬらんかし、盛
りにきよらにねびまさり給へり。

【玉鬘】

10の例は二人がくつろいで同座しているところの、
語り手視線による描写で、夫婦であるからお互い「う
ちとけ」ていてもおかしくない。が、源氏は大勢の前
でも「うちとけ」た姿を見せ、またそれが賞賛される
という点で他とは少し異なっている。

11 〈朱雀院、源氏を評して〉うるはしだちて、はか

ばかしき方《実務方面》に見れば、いつくしくあ
ぎやかに、目も及ばぬこちするを、又うちとけ
て、戯れ言を言ひ乱れ遊べば、その方につけて
は似る物なくあいきやうつき、なつかしくうつく
しきことの並びなきこそ、世にありがたけれ。

【若菜上】

しかし、ふつうは第三者の前で「うちとけ」た姿を
見せて高く評価されることは少なく、むしろ、たとえ
誰も見ていないようなときであっても、「うちとけ」
ている態度があまり望ましくないという感想が述べ
られているときがある。次の12では、匂宮が浮舟を
見咎めて強引に部屋に入り込んでしまったとき、女房
たちが多く休んでいて対応ができない。評価語こそな
いが、このように、女房たちが「うちとけ」ていたた
めに簡単に垣間見できたり、姫君が危機に陥った、と
いう例は12・13以外にも三例ほどあり、14のように、
油断していたことを本人が後悔するというものもあ
る。

12 例もかかる時は（匂宮は中君のもとへ）おそくも
渡り給へば、みなうちとけて休み給ぞかし。

13 〈夕霧が落葉宮のもとに通っていたと聞いた母御
息所は〉たはやすく心ゆるされぬことはあらじと
うちとけたるぞかし。

【東屋】

14 さて、あさましく、〈薫は〉たゆめたゆめて入
り来たりしほどよ《油断させておいて侵入してき
たことだ》、…猶うちとくべくはたあらざりけり
かし、などと〈中君は〉いよいよ心つかひせらる
るにも、…

【宿木】

他にも次のように、「うちとけ」た状態を見られた
り聞かれたりしたかと思つて、恥ずかしがったり悔し
がったりしている例が見られる。

15 うちとけたりつる事どもを、聞きやしたまひつら
むと、いといみじくはづかし。

【橋姫】

16 ただおぼえぬ人《思つてもみなかつた人》夕霧
にうちとけたりしありさまを見えしことばかり
こそ《落葉宮は》くちをしけれ。

【夕霧】

誰もいらないと思つて気を許した姿なのだから、それを見
られたら恥ずかしく思うのは当然だろう。というこ
とは、見られては困るような姿ならば、プラス評価に

は結びつきにくいはず。あくまでも纏わない、その人の本質が出てしまっているのだから、これを「をかし」と言うとしたら、いかにその人物がすばらしいかを強調する場合と、目撃した側の「物珍しさ」が加わっている場合のどちらかだろう。

人前で「うちとくる」のは、ふつうならば考えにくい状況である。気配りをしていないから、女房などであれば役目を果たしていないということにもなる。以下は、まったくのマイナス評価ではないが、垣間見た者がいったんは「よくない」と判断した例である。

17 〈軒端萩は〉にぎははしうあいぎやうづきをかしげなるを、いよいよほこりにうちとけて、笑ひなどそぼるれば、さる方にいとをかしき人ざまなり。〈源氏は〉あはつけし《軽々しい》とはおぼしながら、まめならぬ御心はこれもえおぼし放つまじかりけり。 【空蟬】

18 かたはらいたきまで《きまりが悪くなるくらい》うちとけたることどもを言ひて… 【宿木】

19 ほのかなる朝ぼらけのほどに、御簾巻き上げて、人々あたり。高欄におしかかりつつ、若やかなる

限り〈女房たち〉あまた見ゆ。うちとけたるは、いかにあらむ、…色々なる姿はいづれともなくをかし。 【野分】

次例では、普段着姿にさつと小桂を羽織つて源氏に相對する際の区別を示した明石上が「いたし（見事だ）」と評されている。一人のときは「うちとけ」た服装でいても、人（夫も含めて）が来ればただちに整える、というのが平安貴族社会の女性としての心得であり、「身だしなみ」というものだろう。

20 〈端近で筆を爪弾いていた明石上は源氏訪問に氣づくと〉うちとけなえばめる姿に、小桂《略礼装》ひきおとして、けぢめ見せたる、いといたし。 【野分】

そして、やはりどんな状況でも心用意を忘れない（完全には「うちとけ」ない）人たちは、プラス評価を受けているのである。

21 〈薫、宇治の姫君たちを垣間見する。大君の〉見おこせ給へる用意、うちとけたらぬさまして、よしあらんとおぼゆ。 【椎本】

(2) 人に「うちとく」という場合

次に、「人にうちとく」という用法で、評価語が見られる場合がないか、また、その主体と対象に偏りがないか確認してみた。大きく男性・女性でくくつてみると、男性が主体という例はかなり少なく、男性に対する肯定形（気を許す、馴れ親しむ）が三例（源氏が兵部卿宮に「なつかしううちとけ給へる」【紅葉賀】・源氏が朱雀帝に「われもうちとけて、…みな聞こえ出で給てけり」【賢木】・匂宮が薫に「うちとけながら対面し給へり」【浮舟】）、対女性はなし。男性に対する否定形（気を許さない、距離を保つ）が一例（匂宮が夕霧を「うちとけて見えにくく、ことごとしき物に思ひきこえり」【椎本】）、対女性が四例（うち二例が柏木の女二宮への対応「をさをさうちとけても見えたてまつり給はず」【若菜下】・「けなつかしう、心ばへをかしう、うちとけぬさまにて過ぐい給ひければ」【柏木】、二例は次に示すように第三者の推測）だけである。

22 〈葵上が亡くなったときに、左大臣が源氏に言う〉

「源氏が葵に」うちとけおはします事は侍らざりつれど、さりとともつひにはとあいな頼めし侍りつる」

23 〈薫が浮舟を訪ねてきたが〉「あやしきまで心のどかに、もの深うおはする君なれば、よも人のゆるしなくて、うちとけ給はじ」〈と弁尼が請け合う〉

女性が主体の場合、対象が女性の肯定形は紫上と明石上がお互いに「親しくなる」（これもうちとけぬるはじめなめり【藤裏葉】）、女三宮が紫上に「子どものように安心して気を許す」（幼き御心ちにはうちとけ給へり【若菜上】）、玉鬘が冷泉院の女御たちを「心頼みにする」（出だしたて侍りしほどは、いづ方をも心やすくうちとけ頼みきこえしかど【竹河】）という三例のみ。否定形は、一般論として女房に気を許してはいけないのだ、と宇治大君が慨嘆するのを始めとして、姫君が女房に、という例が三例ある。

24 昔物語にも…うちとくまじき人の心にこそあめれと《女房というものは信じられない》、【総角】
25 〈藤壺は〉命婦をも、むかしおぼいたりしやうに

も、うちとけむつび給はず。

【紅葉賀】

26 〈朝顔齋院は〉さぶらふ人にもうちとけ給はず、

いたう御心づかひし給ひつつ、…

【朝顔】

他に紫上が源氏に明石上を評して「心はづかし」くてうちとけにくかった（【若菜下】）と言う例と、源氏が紫上の明石上に対する対応を、安心できる人と思いつながら、全く気を許すわけではなくたしなみのある振舞いをしていた（【幻】）、と回想する例とがある。

結局、五七例中、主体が男性だったのは八例のみで、残る四十九例中、女性が女性に対して「うちとく（うちとけず）」が八例、三分の二以上が「女性↓男性」ということになる。この中には、特に男女関係というのではないもの（女房が女主人に懸想する男に、とか、親と思う人に、など）も含まれるが、大方は恋愛の相手である。前出の斎藤氏は「うちとける」は肉体関係の成立を表す場合に使われることが多い」と述べており、確かに男女間の「うちとく」の究極の状態として、文脈上そう読める場合もある。しかし、「うちとけ」た関係にはかなり段階性があり、「うちとく」の語そのものがそこまでの意味を持つとは考えない方

がよいと思う。たとえば、

27 〈夕顔が〉すこしうちとけ行くけしき、いとらう

たし。

【夕顔】

のように、明らかに「うちとけ」方に程度があるという表現が見える。また、

28 〈空蟬は源氏と自分の格差を認識しているから〉

うちとけきこえん事わびしければ…

【帚木】

29 〈女房たちは大君が薫と結婚することを望み〉

とくうちとけて、思ふやうにておはしまさなむ、

と言ふ言ふ寝入りて…

【総角】

のような場面では、女が男に心を許して深い仲になる、という意味にとれるが、先の22や次の30のように、夫婦となつてからも「うちとけ」ない間柄であることも多くあるのである。

30 〈玉鬘は鬚黒と結婚後〉ほど経れど、いささかも

うちとけたる御けしきもなく、…

【真木柱】

さらに、宇治大君が、薫とは女房の取次を介さずに話すほど「うちとけ」ていながらとうとう男女の仲にはならなかったことを、後に「うちとけはつ」ことを拒んでいたと述べられる。

31 〈男女の仲ではないが、大君が薫に〉よろづに残りなく頼みきこえて、あやしきまでうちとけにたるを、… 【総角】

32 かのうちとけはてでやみなんと思給へりし心おきては、〈中君は〉猶いとおもおもしろく思出られ給ふ。 【宿木】

また、言い寄る男性―源氏だけではなく、周囲すべてに心を許せない朝顔齋院のような女性も描かれている。

33 〈源氏への〉御返りもうちとけて聞こえ給はず。 【朝顔】

34 人のもの言ひを憚りつつ、うちとけ給べき御けしきもなければ、… 【朝顔】

35 さぶらふ人にもうちとけ給はず、いたう御こころづかひし給ひつつ、… 【朝顔】

肯定形・否定形の割合は約二対一だが、評価語が現れる例は少ない。また、「うちとく（うちとけぬ）」主体・対象は圧倒的に女性が男性に、ということになる。

ここまで、人が人に「うちとく」という場合の、人

物関係に目を留めて整理してみたところ、誰かに対して「心をひらく・気を許す（許さない）」という意味で「うちとく（うちとけず）」という用例は、原則的に身分や年齢が下のものから上のものに対してあらわれている。典型的なものは子どもが親に、女性が夫となる男性に、「頼む」とともに使われるような場合である。

ゆえに、男性から女性への「うちとく」はほとんどなく、柏木が妻であつても女二宮を高くもてなすという特殊な例だけで、男性が「うちとくる」同性の相手も限られている。「うちとけ」た姿の描写が多い源氏でさえ、人に対して「うちとくる」場合の相手は帝と兵部卿宮、しかも後者は自分の愛する藤壺の兄、紫上の父であるから、単なる皇族という位置づけとは異なっている。人が誰かに対して「うちとけ」られるのは、安心して（すつかり信用して）自分をさらけ出せる相手だということであり、そう判断するかどうかは「うちとくる」主体にかかってくることなのである。

さらに、「うちとけ」ている主体の人的傾向等については次節で述べることにする。

(二) 「うちとけ」 ている主体の特徴

最後に、「うちとけ」ている状態、または「うちとけ」ていない状態が描写されている（さらに何らかの評価が下されていればそれも含めて）主体に偏りがないうちとけを確認してみる。すると、「うちとけ」た姿をプラス評価されているのは、圧倒的に源氏であることがわかった。前出の10・11に加え、

36 若人どもにたはぶれ事などの給ひつつ、暑さに乱れ給へる（源氏の）御ありさまを、見るかひありと思ひきこえたり。大臣も渡り給ひて、かくうちとけ給へれば、… 【帚木】

37 〈某院で〉げにうちとけたまへるさま世になく所からまいてゆゆしきまで見え給ふ。 【夕顔】

38 宮《兵部卿宮》も、この御さまの常よりもことになつかしううちとけ給へるを、いとめでたしと見たてまつり給ひて、… 【紅葉賀】

39 〈明石上に〉泣きみ笑ひみうちとけのたまへる、いとめでたし。 【松風】

40 いとなまめかしき桂姿うちとけ給へるを、いとめでたうれしと〈明石の母尼は〉見たてまつる。 【松風】

のように、さまざまな人の目から「うちとけ」た源氏のすばらしさが語られる。これはまさに源氏という人物の本質的美質が、どのような状態であつても否定し得ないということなのだろう。

他の男性の「うちとけ」た姿の描写は少ないし、プラス評価となると、源氏以外では息子の夕霧、薫でも一例ずつあるのみである。

・夕霧 41 〈深い関係になつてから、落葉宮が間近で見た夕霧は〉うるはしだち給へるときよりもうちとけてものし給ふは、限りもなうきよげなり。 【夕霧】

・薫 42 〈薫の〉うちとけたる御有さま、今少しをかしくて〈浮舟の部屋に〉入りおはしたるもはづかしけれど、… 【東屋】

なお、柏木は、病床でも「心にくくぞ住みなし給へる」とあつて、「うちとけながら用意はありと見ゆ」と高く評価されている。

女性では、夕顔・玉鬘に複数回「うちとく」の例があるが、くつろいでいる状態そのものに対しては評価語はなく、源氏に心を許していることやそのさまが「らうたし」「あはれ」などと受け止められている。

・夕顔43うちとくる心ばへなどあやしく様変はりて、

… 【夕顔】

44 よろづの嘆き忘れてすこしうちとけ行くけ

しき、いとらうたし。 【夕顔】

45 け近くうちとけたりしあはれに似る物なう、

… 【末摘花】

・玉鬘46ひとへに〈源氏を〉うちとけ頼みきこえ給

ふ心むけなど、らうたげに若やかなり。

… 【胡蝶】

47 やうやうなつかしううちとけきこえ給ふ。

… 【篝火】

ちなみに紫上も玉鬘が「うらなくしもうちとけ頼みきこえ給らんこそ心ぐるしけれ」と言っている。

紫上は源氏と並んだ姿を「見るかひ多し」と評される(10)以外に、六条院の描写の冒頭で、紫上の春の御殿は「生ける仏の御国」のようだが、「さすがに

うちとけて《そうはいつでも堅苦しくなく》、やすらかに住みなし給へる」(【初音】)という部分があるのみである。

浮舟は、上衣をつけていない、下着のような白い衣を数枚重ねただけの姿が二回描写されている。逢つて間もない匂宮にそのような姿を見せてしまうのだが、匂宮にとつては「めづらか」なため、49では高評価となつていふと考えられる。

浮舟48ひきつくるふこともなくうちとけたるさまをいとはつかしくまばゆきまできよらなる

人《匂宮》にさしむかひたるよと思へど、

紛れむ方もなし。 【浮舟】

49 常に見給ふ人《中君や六の君》とても、か

くまでうちとけたる姿などは〈匂宮は〉見

ならひ給はぬを、かかるさへぞ、猶めづら

かにをかしうおほされける。 【浮舟】

軒端萩は前出例(17)の他に、夫が決まっても「変はらずうちとけぬべく見えしさま」だったと源氏が思う(【夕顔】)例があるが、どちらも「あはつけし」の評が響いている。

玉鬘に「うちとけ頼む」という表現があつたが、これは他に未摘花（うちとけ頼みきこえ給へる御様、あはれなり。【初音】・雲居雁（いまはとうちとけて夕霧を）たのみ給へる【若菜上】）の類例があり、「子どもが親にうちとく」という例では、明石姫君が源氏になつく場面（「すこしはちらひたりしが、やうやううちとけて」「にほひまさりてうつくし」【松風】）がある。

また、空蟬は「うちとけ」ていたときは「いとわりかりしかたちさま」だった（【未摘花】）と源氏に評されている。

それでは、「うちとけ」ないことが描写される主体としてはどのような人物があげられるかというところ、まずは、明石上、そして六条御息所がその典型であろう。

明石上は、明石にいたるときから「身分にしては」京の高貴な女性のような振る舞いをする⁵⁰と評され（「物嘆かしてうちとけぬ心さまを、こよなうも人めきたるかな、さしもあるまじき際の人だに」【明石】）、一人でいるときこそ「うちとけ」て琴を弾くような姿も描写される（「けはひしどけなく、うちとけながら

掻きまさぐりける程見えてをかしければ」他二例）

が、実子の明石姫君の前でさえ「常にうちとけぬさまし給ひて、わりなくものづつみし」（【若菜上】）、源氏にも紫上にも「はづかし」と言われる女性である。

50 うちとけぬけしき下に籠もりて、そこはかとなく

はづかしき所こそあれ。（源氏評） 【若菜下】

51 うちとけにくく、心はづかしきありさましる

きを、（紫上評） 【若菜下】

一方、六条御息所は、その「うちとけぬ御ありさまはけしきことなる」（【夕顔】）と讃えられはするが、源氏に「心ゆるひなくはづかし」と感じさせ、「うちとけては見落とさるる事やなど、あまりつくろひしほどに」と評される（【若菜下】）ほど自己を律した女性であった。彼女の女房（中将のおもと）もそれにふさわしく、源氏に対しての「うちとけたらぬもてなし」が「めざまし」と評価されている（【夕顔】）。

明石上は、「おぼろげにやむごとなき所にてだに、〈源氏が〉かばかりもうちとけ給事なく、気高き御もてなし【薄雲】」であると聞き、自分が軽々しく扱われないように心を砕く。また御息所も、「うちとけて

は見下される」という怖れを抱いて心を開けない。どちらとも、かたや自らの気概と誇りで築き上げ、かたやもともと持っている社会的地位―貴族社会における高い階級―を、それぞれやや鬱屈した思いを秘めて対する夫や恋人である「強者」の源氏に「うちとけ」することで危機に陥らせることのないよう、常に慎重に、我が身を守っているのではないだろうか。

ほかには、宮中の上流階級の女性一般について、

52 〈花散里の方の女房・童は〉うちとけず、心づかひしつ過ぐし給ふ。 【薄雲】

53 〈六条院の女性たちの〉これもかれも、うちとけぬ御けは子どもを聞き見給ふに、大将《夕霧》も、いと内ゆかしくおぼえ給ふ。 【若菜下】

のように「うちとけ」ないことが好ましい状態として描かれている例がある一方、以下三例のように、どちらかというとき否定的な形容語も並んでいる場合もある。

54 (1重出) 〈源氏がふだん会っている女性たちは〉うちとけたる世なく、引きつくるひそはめたるうはへをのみこそ見給へ、 【空蟬】

55 こもかしこも、うちとけぬかぎりの、けしきばみ、心ふかき方の御いどましきに、 【夕顔】

56 〈冷泉院の女御たちは〉誰もうちとけ給へるやうなれど、をのを、うちうちは、いかがいどましくもおぼすこともなからむ。 《薫の言》 【竹河】

これらの上流階級の女性たちの態度は、常識的には賞賛されるべきものであるが、源氏など男性側にとつては、自分の恋愛対象として見たときには、やや窮屈に感じられるものでもあったのだと解せる。そのため、源氏は六上御息所に「明け暮れうちとけてしもおはせぬ」ことになり、女房に「心許なし」と思わせる(【夕顔】)し、正妻の葵上のもとにも「うちとけおはします事は侍らざりつれ【葵】」という状態だったのである。

それに対して、同じ身分高い女性であり、「うちとけ」ないのに、同時に「なつかし」と言われるのが、藤壺と紫上である。やはり、この二人は源氏にとつて特別の女性だったのだということが、「うちとく」をキーワードにしたときにも浮かび上がってくる。ただ

し、紫上は「うちとけ」しているときもプラス評価を得ている（前出）が、藤壺は「うちとけ」た姿の描写が全くないという点では異なっており、これは二人と源氏の関係の違い（片方は妻として日常的に接することができ、もう一方は滅多に逢える間柄ではない）に基づくものと考えて良いだろう。

・藤壺 57 〈源氏との逢瀬に苦悩する藤壺は〉いとうくて、いみじき御けしきなるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず心ふかうはつかしけなる御もてなしなどのなほ人に似させ給はぬを、 【常夏】

・紫上 58 〈源氏が女三宮のところから夜明け前に紫上のもとに戻る〉少し濡れたる御単衣の袖をひき隠して、うらもなくなつかしき物から、うちとけてはたあらぬ御用意など、いとはつかしげにをかし。 【若菜上】

（さりとて〈明石上に〉ひたふるにはたうちとけず、ゆるありてもてなしたまへりし

【幻】（

それにやや類似しているのが宇治大君だが、こちら

は、前出 21 のようにもともと心用意のある人物である上に、

59 〈薫に〉うちとくとはなけれど、さきさきよりははすこし言の葉統けて、ものなどの給へるさま、いとめやすく、心はつかしげなり。 【権本】

60 〈薫に〉うちとくべくもあらぬものからなつかしげにあいぎやうづきてもの給へる。 【総角】
のように、やわらかい態度ながら「うちとけ」ないまま、最後まで男性に「いかでかく〈中君のように〉うちとけじ【総角】」という意志を強く持っていた女性として描かれている。

三、結語

以上のように見てくると、人に「うちとく」ということはどちらかといえば立場の弱い、上下関係で言えば下の側の行為であると考えることができ、現代語の「気を許す」とは異なっているといえる。对人的に用いられる「うちとく」は、単に相手にリラックスして応対するというのではなく、自分をさらけ出してしま

う、というところまで含意しているのではないだろうか。このようなとき、うちとけられた方から見れば、相手を「かわいい」と感じることはあろう。また、恋愛の対象である女性には、自分を頼ってすべてを見せてほしい、と願うことも十分に考えられる。そのとき、「うちとくる」行為や、自分だけが見る「うちとけ」た姿はプラス評価を与えられ得るのである。特に子どもや若い女性が、あまり深い考えもなく自分に好意を示してくれた人に「うちとくる」ことは、やはり「かわいい」と評されることが多く、それが継母と子の関係であったりすれば、「うちとくる」ことが人間関係を円滑にするために必須であることもある。ただし、子どもの頃であっても紫上は源氏に「うちとけ」たという描写はないし、幼さが強調される女三宮も源氏に「うちとけ」はしない。この辺を考え合わせると、幼くても、品高い女性たちは「うちとくる」主体として描かれず、玉鬘や浮舟のように成長期に田舎にいた、というような女性が「うちとくる」ことは、女性にとつての「うちとく」ということの非貴族性を象徴しているように見える。

つまり、大人の女性、しかもある程度以上の階層に属する女性であれば、簡単に「うちとくる」ことは常識に反する。そして、客観的に「すばらしい」と讃えられるのは、むしろ完全にうちとけはしない女性である。男性が女性と「うちとけ」て逢いたい、と思うのは、自分の優位が確定している場合のように見える。高貴な女性であれば、男性にうちとけきらないことも美点の一つであり、魅力となる。また、「うちとけ」た態度に近くても、「すぎがある」とは感じさせない心構えや品格がどこかにある、ということも、最高級の評価を受けるためには必要である。

「うちとけ」た姿や心持ちは、一般的に人前にさらすものではない。そんな姿でさえ賞賛されるに足るのは、源氏物語の登場人物では源氏しか存在しない。特に女性であれば、くつろいでいる姿をむやみに人に見られぬようにするだけではなく、もしもどこかで見られていたり、突然恋人に訪問されたりしても、「恥ずかしい」と思わないですむよう、常にいくばくかの緊張感を保ち、たしなみをもって過ごすことが求められるのである。ただ、それがあまりにかたくなであれば

相手をも緊張させてしまう。簡単に「うちとけ」過ぎでは軽んじられ、「うちとけ」なければ相手も「うちとけ」て向かい合ってはくれない：源氏物語の女性たちは、このジレンマの中にあるように見える。

「うちとけ」て相手の男性を頼りに生きるしかなかった夕顔や、ある時期を境に目覚めるとはいえ、年若くてすぐに「うちとけ」てしまった玉鬘、浮舟。それに対して、深い関係を結ぶのを拒んでかたくなに「うちとけ」ない空蟬や朝顔齋院、人間としての薫には「うちとけ」ながらも、「うちとけはて」てすべてをさらけ出し、自分を任せることは選べなかつた宇治大君のような女性もいる。男女の関係になっても、ひたすら「うちとけ」ずに振る舞う六条御息所や明石上のような選択もあるし、「うちとけ」ずに応対しているが、拒絶しきれない気持ち「なつかし」と思わせる藤壺や、相手に距離感を感じさせないやさしさ、かわいらしさを持ちながら、どこか心の奥底に「うちとけ」られない一線を持ち続けている「うちとく」があらわす状態や行為は、高貴な身分の女性にはあまりふさわしく

ないものと解釈できるだけでなく、単純には現代語に置き換えられない「うちとく」という動詞が、登場人物の人物造型にも大きく関与していると考えたい。

注1・斎藤暁子「「うちとける」の考察―夕顔の巻に於ける

―」『解釈』二三・九（一九七七・九）

注2・岩波書店『新日本古典文学大系・源氏物語索引』に依つた。

注3・引用の用例本文は岩波書店『新日本古典文学大系』による。